杉並ユネスコ協会会報

156号
2025年
12月19日

Suginami UNESCO Association News Letter

戦争は人の心の中で生まれるものであるから、
人の心の中に平和のとりでを築かなければならない

ユネスコ憲章前文より

- ●心の中に平和の守りを固めよう
- ●すべての人間の尊厳を重んじよう
- ●教育・科学・文化の発展に努めよう
- ●民族間の疑惑と不信をのぞこう
- ●世界を友愛と信頼のきずなで結ぼう

United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization

杉並ユネスコ協会

目次

特集 ユネスコ関東ブロック大会／全国大会‥‥2
ユネスコ運動の日‥‥‥

2025年度 関東ブロック・ユネスコ活動研究会 in 埼玉

次世代につなげよう平和の心　ー戦後80年、今できることはー

2025年9月27日（土）　埼玉県深谷市 深谷市民文化会館

このような研究会に参加することは、個人の学びになると共に、近隣のユネスコ協会の活動の様子を知ることで、良い刺激が貰えると思っている。そして、日帰り小旅行も楽しめる。ユネスコ仲間との交流は大切だ。

研究会のオープニングイベントは、室町時代から450年続く「血洗島（ちあらいじま）獅子舞」。伝統的な獅子舞は各地にあるが、更に今回、ここで重要なのは、血洗島が渋沢栄一翁の生誕地であるという事なのだ。つまり、今回知りえた最大のポイントは、「栄一翁を学び、栄一翁の心を受け継ぐ」活動を深谷ユネスコ協会は、活動の芯に据えている事。栄一翁の心の礎は論語にあると。

深谷ユネスコ協会では、月一回「論語の素読会」をしているという。結果、家庭内でも論語を話題にし、親も子も孫も論語に親しみ暗唱をしているのだ。

ユネスコ主催で「子どもの暗唱を楽しむ会」も実施されていた。その成果として、小学二年生の関口結子さんの「論語の暗唱」発表が有った。気持ちの籠った見事な発表！論語が日常にある生活が此処には有った。

それで思い出したが、以前アジアの児童文学者の大会が台湾で開催された際、私も参加し、案内された児童書専門の書店に子供向けの「論語」が何冊か置いてあった。カラフルな挿絵が散りばめられた本で、中国語が読めない私が、辞書を引きながら読んでみようと二種類購入した。台湾では、子供が「論語」を読むのだと驚いた。

それから、栄一翁の生家「中の家（なかんち）」の文化遺産ガイドを中学1年生の鈴木椛恵さんが披露してくれた。ジュニアボランティアガイドとして活動している椛恵さんは、栄一翁とふるさと深谷を誇りに思っていた。

基調講演は前深谷市教育委員会教育長・小柳光春氏で、栄一翁の「立志と忠恕の深谷教育プラン」を策定展開したと講演。渋沢栄一翁の教えを核とした「志を育てる教育」の推進。自立と他者への思いやりを育てる教育。

小柳氏の考えは古いものではなく、「教育は今日のためにあるのではなく、未来のためにある」と語った。そして、男尊女卑の考え、女性への偏見を改め、女性が活動しやすい社会にしなければならないと結ばれた。

本当に刺激的な見聞の広がる興味深い大会だった。

（理事　辻　邦）

第81回 日本ユネスコ運動 全国大会 in 金沢

『日常』能登半島の創造的復興を目指して

2025年10月18日（土）　石川県立音楽堂邦楽ホール

2024 年元旦の能登半島震災、さらに同年9月の豪雨災害に見舞われ、能登半島は二重の打撃を受けた。

今回の参加者は皆、半島の復興はどうなっているのだろうかという思いで集まった。被災を受けた方々は根こそぎ日常が奪われた。当事者が語る現在の復興状況、そしてこれからの希望、参加する私たちが被災者の皆さんの思いを受け止め、どう連携していくのか何ができるのかを考える大会にしていこうと、私は参加した。

会場に入ると軽快なジャズの音楽が流れていた。オープニングはキッズ・ジャズバンド BASIC の演奏。小・中学生のはち切れそうな笑顔が印象的だった。

開会式後は中学生による能・狂言の披露。どちらも心を込めての演技に大きな拍手。司会も子供たちであった。

次に「となりのトトロ」「魔女の宅急便」を歌った歌手の井上あずみさんと娘さんのゆーゆさん（現在音大生）の歌とお話コンサート。あずみさんは数年前のコンサート中に脳卒中で倒れ、現在車いす生活。家族や周りに助けられ、コンサートを再開。優しく透明感のある歌声は会場の皆を魅了してくれた。最後に「ユネスコの歌―手に手をとって」を皆で大合唱。

休憩（みんなでラジオ体操第一を行う！）を挟んでパネルディスカッション「『日常』能登半島の創造的復興を目指して」が行われた。

コーディネーターは地震をきっかけに復興ネットワークを立ち上げ、地域内外の活動を繋いでいる金沢大学の先生、森山奈美さん。パネリストは珠洲市の地域で若者や女性が未来に希望を持って暮らせる場づくりをと、会社を立ち上げた伊藤紗恵さん。輪島市で輪島塗の漆器店を経営し、輪島塗を通して人を能登半島に呼び込む動線を作っていきたいと熱意を語る田谷昂大さん。能登町のお酒づくりの会社で広報を担当し、能登の人々の温かさを伝えたいという数馬しほりさん。穴水町の防災士会で避難所の運営にも関わり、まわりの親切にこの町で生きていこうと決心した橋爪里美さん。志賀町で町長になった直後の大震災に無我夢中で対応してきた稲岡健太郎さんの5名。

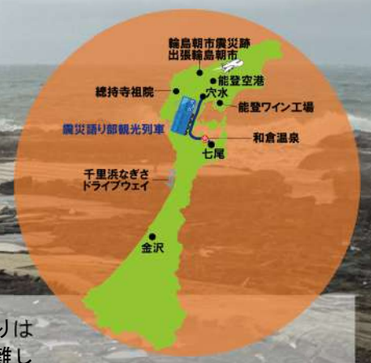
そこで気が付いた。コーディネーター・パネリストたちはとにかく皆とても若い！その若者たちが震災の被害に見舞われながらも、大切に育まれてきた地域の伝統文化・自然、そしてそこに住む人々との繋がりを、次の世代が自分たちのやり方でどう守っていくことができるのか、真摯に向き合う姿が垣間見られたようで改めて感動した。

復興のお手伝いがどうできるかを考えながら帰路に。学びの多い大会だった。（会長　佐藤直子）

全国大会エクスカーション「能登応援旅」

2025年10月19日（日）～20日（月）

[写真]地震による地盤隆起で干上がった天然海苔の畑。基幹産業の一つである水産業は壊滅的な打撃を受けた。



全国大会の翌日、一泊二日のエクスカーション「能登応援旅」に参加した。

金沢駅から出発した貸切バスは、日本で唯一、砂浜を車で走れる奇跡の絶景路、千里浜なぎさドライブウェイを経由して七尾駅へ向かった。ここから震災語り部観光列車に揺られて、穴水駅へ。車窓から見える光景は、能登の美しい里山里海の合間にいまだ倒壊したままの家屋や地盤隆起の跡など、震災の生々しい痕跡が混在している。列車の語り部ガイドが自ら辛い震災経験を語る精神的負担は想像を絶するが、教訓として生かして欲しいと涙を流されていたことが強く胸に残っている。震災の風化防止や教訓伝承の強い使命感、復興への強い意志と希望が伝わってきた。

午後は、いよいよ輪島朝市の震災跡、震災後の出張輪島朝市の見学。個人的に学生時代の思い出が詰まった思い入れのある場所である。日本三大朝市の一つ輪島朝市は、平安時代から1000年以上の歴史を持ち、毎日2万人の観光客が訪れていたという。元旦の火災から5日後に鎮火し全焼したその場所は、一部倒壊した家屋が手付かずのまま残っているものの、ほぼさら地になっていたが、所有する土地の境界がわからない状況だという。

奇跡的に焼失をのがれた造り酒屋の日吉酒造

奇跡的に大火を逃れた造り酒屋の日吉酒造は、酒蔵が全壊し、酒造りができない状況にあった。閉ざされた店舗の入り口には、震災後にユネスコ無形文化遺産に認定された「伝統的酒造り」のポスターが貼られており、再建への強い気持ちを垣間見た気がした。

かつて200店舗以上の露店が立ち並んでいた朝市通り。現在は1kmほど離れた商業施設内で「出張朝市」として再開し、以前の4割ほどの店が営業している。その中で乾物を扱っているおばあちゃんは、「仲間がいるから戻ってきた」と笑顔で語った。しかし、話を聞いていると「震災以来、何を食べても全く味がしない」そうだ。今回、出会った方々は皆、前向きに未来へ向けて頑張っている姿を見せてくれていたが、心に刻まれた傷の深さは底知れず、うまく言葉を継ぐことができなかったことが悔やまれる。

出張朝市には、輪島塗りの店舗もいくつか出店している。どの店主も皆、その魅力を熱く語ってくれた。

これまで輪島塗りは高級で取り扱いが難しい特別なものというイメージを抱いていたが、実際は、軽くて美しく丈夫、欠けても割れても修復が可能で、半永久的に日常使いができるものだと学んだ。これは、昨今のシンプルライフや上質な暮らし志向に合致するのではないか。

輪島朝市にて蔵出しされていた貴重な一品

能登のワイナリーにも立ち寄ることができた。過疎が進む地域をワイン産業で元気にしたいと2006年に始まったこの醸造所は、流通を県内のみに絞り、能登の豊かな食文化を支えるべく奮闘し続けていた。

この日の宿泊は、日本を代表する老舗温泉地として名高い和倉温泉。温泉街の震災時の状況は、翌朝訪れた和倉小学校で知ることとなる。和倉小学校の体育館はごく一般的な体育館だが、地震発生当日から4ヶ月もの間、避難所として利用され、収容人数は最大時1,400人を超えたという。水道・下水が壊滅的、加えて体育館にエアコンが無かったが、幸いなことに電気は通っていたそうだ。また、避難生活を送る市民がいる中で、学校運営を再開せざるを得なかった状況下では、両者の活動エリアの境界が徹底できず大きな混乱を招いたという。現地の主力産業である旅館は、2年経った現在も営業再開は半数に届いておらず、県内外へ移住した人も少なくない。小学校の生徒数も2、3割減ったが、月1回の避難訓練で地域の人々との関わり合い方や交通の流れなど、震災前には意識しなかったことを学んでいるという。

応援旅の終盤は、曹洞宗（禅宗）を開いた僧侶が開宗した地である総持寺祖院(※)と、能登空港に立ち寄った。

全国大会で地元の方が語った「後継者問題をはじめ、地震がなければ先送りになっていた多くの課題に取り組むきっかけとなった」という言葉が、今も深く胸に刻まれている。自分の生活の中にも、先送りしている課題がいくつもあるが、機会を逃さず行動するようにと背中を押されたかのように感じたのだ。

今回、能登を応援するつもりで訪れたが、復興に立ち向かう人々から学ぶことの方がはるかに多い旅となった。現地に赴かないと分からない空気感がある。心が癒えぬ中でも、未来へ希望を持って試行錯誤している人々の姿。ぜひ一人でも多くの方が足を運び、心で感じていただきたいと願う。この地の「復興」は、日本の未来図そのものではないだろうか。（副会長　西野裕代）

（※）能登に約600年間君臨した曹洞宗の最高峰。明治時代の火災により本山は横浜へ移転したが、現在も大本山總持寺祖院として一大聖地とされている。

講師　的川 泰宣 氏
——まとがわ やすのり
JAXA 名誉教授
国際宇宙教育会議日本代表
はまぎん こども宇宙科学館館長

JAXA（宇宙航空研究開発機構）の幹部で「はやぶさ」計画に中心的に携わった的川先生から、「アポロ 13 号」について、科学的かつ臨場感あふれるお話をうかがい、危機対応に何が大切かを学びました。

※アポロ 13 号は司令船（オデッセイ、3 人乗り）、機械船（支援船）、着陸船（アクエリアス、2 人乗り、小型）から構成されています。

旅の始まりから事故発生

1970 年 4 月 11 日、飛行士が宇宙船に乗り込みます。出発直前、風疹に感染した疑いでメンバーが入れ替わるハプニングがありましたが、メンバーから外れた人は地上メンバーに加わり、重要な役割を果たしました。

アポロ 13 号を搭載したロケットは、13 時 13 分に打ち上げられました。「13」という不吉な数字が並びましたが、月との関係で時間が決まったそうです。地上の管制センターでは、管制官や機器関係者、飛行士、医師などが交替して飛行状況を見守っていました。

4 月 13 日、アポロ 13 号の異変に最初に気づいたのは医師でした。飛行士の心拍数が上昇していたのです。ハッチの外を見ると靄みたいなものが流れ出ています。機体から酸素が減り止められない状況でした。揺れも大きく、大騒ぎとなりました。飛行士からは「これは死ぬな」と言う声が聞こえ、緊張がはしります。故障により 3 つある燃料電池のうち使用できるのは 1 つだけでした。月面着陸をあきらめ、すぐさま帰還へと切り替えたのです。

着陸船を救命ボートとして使うことに決定。しかし、2 人乗りのため 3 人が入ると生命の維持に必要な「消耗材」（水、電力、酸素）が 1 日半しか持ちません。次に直接帰還（1 日半）か、月の引力により月を回っての帰還（遠回りで 4 日かかる）かが議論になりました。直接帰還では故障気味の司令船ではリスクがあります。そこで月を回る方針になりました。この頃、すでに地上では海に着水する場合に備えて、付近の多くの船に協力を求める作業が始まっていました。

地球への帰還

着陸船を救命ボート代わりに使うとはいえ、大気圏突入には耐熱シールドで覆われた司令船に乗り換える必要がありました。司令船からデータを着陸船に移すのが大仕事。着陸船の準備に通常 2 時間かかるところ、司令船の電気を落とすため 15 分で行うことになりました。

月を回るのに 2 日かかりますが、とりあえずよい軌道に乗せ、その後噴射して帰還軌道に乗せる。いろいろな議論がなされ、不安のうちに噴射。きれいな軌道に乗りました。一方、船長は消耗材のうち、水が不足すると考え、飲み水を制限したため、飛行士は喉がカラカラな状態を余儀なくされました。

地上では、スタッフの中から、2 人乗りの着陸船に 3 人が乗ることにより、二酸化炭素中毒で死亡する危険があることが指摘されました。濾過装置は司令船と着陸船ではメーカーが違うため注入口の形が異なり、それを繋ぐ工夫として宇宙船内にある使える物を探し、加工して利用することにしました。

その頃、NASA（アメリカ航空宇宙局）の長官から地上の責任者へ電話がかかり、長官から「君の決断に任せた。責任は私が取る」と告げられました。大勢の人々が激論を交わし、どう決断を下すか難しい状況にありましたが、長官の言葉に勇気づけられ進めることができました。

4 月 15 日午前、最後の噴射にむけて NASA の幹部の間で議論が重ねられました。午後、噴射の準備開始。このとき 25 分間だけ月の裏側に入るため、地上からの交信はできなくなります。その間、月面に行ったことのない 2 人の操縦士は、地球を見て興奮しながら写真をたくさん撮っていました。

20 時 30 分、噴射成功。以後、最低限の生命維持のための電力以外は落として飛行士は眠りにつきました。

大気圏再突入を前にして、原因はわかりませんが、突入する角度が浅くなってきました。また、地球に戻るには司令船の重さが足りないため、着陸船から物を持ってくる（ゴミ等は着陸船に移す）必要がありました。非番の管制官チームが再突入のための膨大なチェックリストを検討し、それを読み上げながら管制室と飛行士の意思統一を図っていきました。しかし間違いが許されないため、ときには苛立ち言い争いになることもありました。

翌 2 時、作業リストが完成し飛行士に送信。飛行士は 2 時間ほど休息しました。5 時、作業開始。機械船を切り離します。その際、機械船が大きく爆発している様子が確認されました。機械船は司令船の耐熱シールドの近くにあり、司令船に被害がないか大きな不安を抱えたまま地上 3 万キロになり、着陸船を出て司令船へ移動しました。着陸船のエンジンを噴かし、司令船の角度を直します。大気圏突入。一時、交信が切れます。交信復帰の時間を過ぎても応答がありません。——3 分経ち、「OK、ジョー」の声。交信が復活し管制センターは歓声に包まれました。パラシュートが開き、太平洋上に着水。アポロ 13 号は空母によって無事に回収されました。

帰還後、事故調査が行われました。機械船の中には液体酸素があり適切な温度管理が必要です。アポロ 13 号の酸素タンクは大きな負荷にも耐えられるよう改良されていましたが、温度変化を制御するサーモスタットだけが従来の設計のままでした。酸素タンクの内部は 500 度を超えるまで上昇したと予想されます。ヒューストンで行った再現実験でも同じ結果が得られたとのことです。

講演の最後に、的川先生は宇宙と危機管理について次のように指摘されました。「現場ではいろいろな意見が出る。それぞれが正しく、それぞれが不十分である。大局的に考えることが必要」「アポロ 13 号の奇跡の生還に多くの人が取り組んだ。一つの目標をチームで共有して取り組む場合の大きな示唆となった」「『はやぶさ』でも似たような取り組みがあった。余裕を残す戦略的思考、現場で瞬時に決断する戦術的判断が重要（着眼大局着手小局）」「平和や地球環境など、地球全体の問題を乗り越えていく場合にも、多くの人から知見を集め議論していくことが重要」「宇宙の仕事はこれから平和のために役立てることが大切。各国はまだ一つのチームになってはいないが、それが未来に託されることを願っている」。

——絶体絶命の危機に瀕しても前向きに考え続けること、大きな決断を短時間で行うことなど、実際にビジネス界でも取り上げられるほど、的川先生のお話は示唆に富むものでした。貴重な映像もあり、大変わかりやすく臨場感あふれる講演会でした。（理事 山田祐子）

ミイラが納められた 3 つの厨子

ツタンカーメン夫妻

ツタンカーメン王墓内

事前解説の様子

2025 年 9 月 23 日、横浜のみなとみらいにある「ツタンカーメン・ミュージアム」でギャラリーツアーを開催しました。エジプト・ミニア大学のムスタファ・マフムード・エル＝エザビー教授がつくられたレプリカの作品群 130 点余りを 2019 年に日本が購入、現在はプロット 48 の「ツタンカーメン・ミュージアム」で「ミステリー・オブ・ツタンカーメン」（常設展、開催中）として公開されています。

当日は 10 名の杉並ユネスコ協会のスタッフさんも含め、杉並在住の方々、近県からの希望者も含めて 30 名ほどの方が参加して《ツタンカーメンの秘宝》を楽しんでいただきました。会場案内に先立ち、午前中は横浜駅近くの「TKP ガーデンシティ横浜」でパワーポイントを使って、ムスタファ教授の紹介や作品解説、今回レプリカとして再現されている、エジプト「王家の谷」のツタンカーメン王墓内部の説明など、講座や講演会と同様の形式で事前解説をしました。会場内は狭くて暗いですが、角川武蔵野ミュージアム制作の映像も含め、とても見やすい展示となっています。報告も兼ねた写真で会場の様子などをご覧ください。

父王アクエンアテン夫妻と人型棺

ツタンカーメン子供の棺

ツタンカーメン頭部、ハトホル牝牛

王を護るアメンの雄羊

ツタンカーメンの名前の
太陽円盤を戴くホルス神

ヒエログリフとアメン神

義母ネフェルティティ王妃と祖母ティ

筆者(左)とムスタファ教授(右)

ムスタファ教授　黄金のマスクを開く

王のシャブティたち

黄金の玉座

2025年11月1日には、ずっと何年も延期されていたエジプトのギザ大地に建設された『大エジプト博物館(GEM)』が全面オープン。「ツタンカーメン王墓からの出土品」と考古学者吉村作治チームの発見、修復中の「クフ王の第二の太陽の船」も公開されています。建設費用の半分以上は日本の円借款ということも、シーシ・エジプト大統領が発表しました。

(理事／本ギャラリーツアー講師　村治笙子)

●メニュー

キンパ（韓国海苔巻き）
オイソバギ（きゅうりのキムチ漬け）
サムギョプサル（三枚肉の焼き肉）
とうもろこしのひげ茶

●講師　李 南美 氏
杉並区役所韓国語
サポートデスク相談員

2025年度の料理教室は「日韓国交正常化60周年」の節目の年に因んで、韓国料理を企画しました。日本と韓国は地理的にとても近く、一番近い所だと長崎県の対馬と韓国の釜山（プサン）の間が49.5km、フェリーで1時間。気象条件が良ければ、対馬から釜山の街並みが見えるそうです。また、ファッション、コスメ、K-POP、ドラマ、アニメ、ゲームなど韓国のサブカルチャーに魅了されている人々もたくさんいます。

「アンニョンハセヨー！」で料理教室は始まりました。「韓国のオモニ」と自称なさる李南美（イ・ナンミ）さんを講師にお迎えして、「かんたん韓国家庭料理」を教えていただきました。李先生は、杉並区役所韓国語サポートデスク相談員として、33年もの長い間、杉並区のために尽力してくださっている方でもあります。

今回のメニューは①キンパ（韓国海苔巻き）、②オイソバギ（きゅうりのキムチ漬け）、③サムギョプサル（三枚肉の焼き肉）。とうもろこしのひげ茶も添えられました。李先生はとてもヘルシー志向で、たっぷりのお野菜を使い、砂糖は一切使わず、きゅうりのキムチ漬けに使う合わせ調味料【ヤンニョム（薬念）】にも砂糖の代わりにすったリンゴを入れて甘みを付けました。キンパを作るときは、海苔にご飯をなるべく薄く敷いて野菜をたっぷりのせて巻きました。とてもヘルシーでダイエットレシピと言ってもよいくらいのものでした。

李先生は韓国の食文化についてもお話ししてくださいました。韓国の食の特色は、五つの味（辛、甘、酸、塩、苦）と五つの色（赤、青、黄、白、黒）。これらの五味五色をバランス良く食事に取り入れ、健康を保つということ。今回作った三品は、まさに五味五色にぴったりのものでした。

韓国では冬の寒さはとても厳しく野菜の入手が困難。そこで、越冬の準備として、家族、親族や近所の人々で大量のキムチを漬ける伝統的な共同体行事の「キムジャン文化」が昔から続いています。給料1ヶ月分くらいのキムジャンボーナスを支給する会社もあるそうです。キムジャンは共同体全体で食を分かち合い、協力関係を促進し、共同体文化の伝承など、様々な役割を果たしてきました。人々の健康と絆を支える知恵として高く評価され、2013年にユネスコ無形文化遺産に登録されました。

韓国の食事のマナーとしては、器を持ち上げないこと、目上の人が箸をつけてから食べることを教えていただきました。

料理室のコーナーには、成人用と幼児の民族衣装、伝統笹子帽、レディースドレス、ポジャギ（伝統的なパッチワーク）、韓国螺鈿細工のお盆、金属のお箸セットなどが展示されました。

初めて顔を合わせた方々なのですが、それぞれの調理台では皆さんの会話が弾み、チームワークよく作業していらっしゃいました。和気あいあいの中で活気があって楽しそうでした。

終了後のアンケートには、味が大変美味しかった、キンパの具の多さにびっくりした、これまで食べた中で一番美味しいキンパだった、韓国料理は辛いものと思っていたが予想とまったく違っていた、オイキムチはお店で食べる味だった、出来合いのものを買っていたがこれから作ってみようと思う、自宅でもできそうな料理だった、楽しい時間をありがとうの声が寄せられました。なお、手順が今一つ分からなかった、調理のデモンストレーションが必要などの厳しいご指摘もいただきましたので今後の参考にしたいと思います。(理事　水上あつ子)

参加　中学生 17 名　青年部／OB・OG 18 名　理事 4 名
外国人 9 名（ネパール、イギリス、アメリカ、オランダ、ニュージーランド、ウクライナ）

8 月 2 日	8月3〜4日	8 月 5 日	8 月 6 日
開級式	宿泊学習	JICA 訪問	閉級式
セシオン杉並	千葉県立君津亀山青少年自然の家	JICA 地球ひろば	セシオン杉並

2025 年 8 月 2 日、夏のユネスコ教室が開幕しました。

夏のキャンプは、我々杉並ユネスコ協会青年部の活動における最大のイベントです。数ヶ月にわたり準備し、無事今年も中学生や外国人と共に特別な夏の思い出を共有しました。今年は昨年に比べ 1 日少ない、5 日間での開催となりました。開級式に始まり、1 泊 2 日の宿泊学習、そして翌日からは「JICA 地球ひろば」見学、最後に閉級式といった流れで行われ、青年部を含め 40 名を超える人数での実施となりました。

初日、8 月 2 日は前述の通り開級式を行いました。青年部や外国人の紹介を終えると、改めてユネスコおよび中学生クラブの紹介をしました。今年も高校 1 年の青年部員が担当し、中学生としてキャンプに参加していた 1 年前からの成長が見られました。初日を通し、青年部一同、改めて今年も開幕したと実感し気合が入りました。それは昨年との違いによるものです。昨年のキャンプでは、中学生参加者が 6 名と、例年と比較し非常に少ない中での開催となりました。ですが今年の中学生参加者は約 3 倍の 17 名でした。班ごとにアイスブレーキングを終えると、班員の役割分担を決めました。これは昨年からの変更で、人数増加に対応するためです。すべての班に中学生や外国人が 4 名以上はいる構成のため、全参加者が班長・掃除係・食事係のいずれかを担当しました。

そして翌日、ついにキャンプが始まりました。8 時 30 分と、夏休みの中学生には少し早いかもしれない集合時間でしたが、眠い目を擦りながらも全員元気にセシオン杉並に集まりました。今年の宿泊は千葉県立君津亀山青少年自然の家で開催しました。往路のバスでは青年部や OB・OG によるクイズなどで盛り上がり、ユネスコ特有の「何をやってもいい」雰囲気が場を包みました。施設に到着し昼食をいただくと、そこにある大きなプラネタリウムへと向かいました。今の時代に珍しいアナログ式のもので、万が一故障しても修理に部品が残っているかわからないくらいだと、事前訪問時に職員の方が仰っていました。

プラネタリウムを終え、体育館でゲーム大会を開催しました。日英両方の早口言葉や身体を動かしながら班対抗で勝負するレースをし、言語の壁を超えて皆スポーツマンシップをもちながら楽しみました。ですが施設の体育館には冷房が備わっていないため、ゲームの途中からはクーラーのある研修室へと移動しました。急な変更に中学生は素早く対応し、「少しだったけど広い体育館で走れて楽しかった」と満足げに移動していきました。その後も、青年部の代表 3 名にお題を与え「誰が一番〇〇できるか」を当てる青年部ベットチャレンジや、部長である私のプライベートな質問の答えを班ごとに考える、クイズ部長などで盛り上がりました。従来の頭を使う、知識を要するものとは違い班でのコミュニケーションを取りながら皆で予想するような企画であったため、学年や国籍に関係なく発言している様子がうかがえました。ベットチャレンジでは、自分の予想した青年部を必死に応援している姿も見受けられ、広さを活用した体育館企画とはまた違った、身体を動かさなくとも楽しめるゲームならではの良さがありました。休憩時間にも皆で集まって腕相撲をしていて、1 日目の夕方とは思えない仲の良さに我々青年部も驚きました。

ゲーム大会を終えると、夕食、そしてキャンプファイヤーといった予定でしたが、夕食時に局地的な大雨が降りました。ファイヤー予定時刻には雨は止んだもののサイトが水浸しになってしまい、再び研修室でのキャンドルサービスへと変更しました。青年部による劇や歌、ダンスを披露し、中学生たちは事前に配ったペンライトを振ったり、ステージに見立てたキャンドル前で一緒に踊ったりと、皆で同じ空気感を共有しました。その後も火を前にキャンプソングの「Count On Me」を歌ったり、昨年好評だったポンポンを今年も配布し、キャンプダンス「Live While We're Young」を踊ったりと、全身を使ってキャンドルサービスで盛り上がりました。OB や職員の皆様のご協力のもと、その後は外で花火を楽しむことができました。ここでは、手持ち花火が初めてだという外国人に中学生が教えている仲睦まじい姿が見られました。

翌日は野外でカレー作りをしました。中学 3 年生や各班の班長を中心に全員が協力し、それぞれ美味しいカレーが完成しました。日差しは強かったものの木陰は十分涼しく、外の自然に触れながらカレーを食べる体験は、近年の猛暑や環境からはなかなか得られない、非日常的な体験でした。カレーを食べ終わった中学生たちは木の下でウクレレを弾いていたり、鬼ごっこをしていたり、おしゃべりを楽しんでいたりと、各々の過ごし方をしていました。

宿泊を無事に終え翌日の 8 月 5 日は市ヶ谷にある「JICA 地球ひろば」を訪問しました。JICA の職員の方によるプレゼンでは積極的に発言し、その後の見学でも好奇心旺盛な様子が見受けられました。

最終日となった 8 月 6 日には、セシオン杉並に戻り思い出動画の放映や寄せ書きなどを行いました。青年部を含めた全員から寄せ書きをもらえたと喜びを伝えてくれた中学生もいました。私自身、部長という立場があり班には所属せず、そのため中学生と喋る機会も班所属の部員に比べ少ないにも関わらず、私の元に寄せ書きを書いてほしい、書かせてほしい、とたくさんの中学生が来てくれました。寄せ書きを書いた後は体育室に移動し、写真撮影やキャンプソング・ダンスを最後に楽しみました。そうして名残惜しくも、今年のキャンプは閉幕しました。

私は、今年が部長・キャンプ長として 2 年目のキャンプとなりました。昨年から規模が大きくなりパワーアップしたキャンプでしたが、今年もユネスコらしいものが作り上げられたかと思います。開催にあたりご尽力くださった皆様に心より感謝申し上げます。今後も青年部は活動して参りますのでご協力いただけますと幸いです。何卒よろしくお願いいたします。

（青年部部長　田村紗依）

September 13

国境なき医師団 講演

October 12

東京ジャーミイ訪問

November 8

世界の言語

ユネスコ入門 Vol.2

国連機関ユネスコの活動をやさしくひもとくコーナーです。第２回目は、ユネスコ活動の全体像をお届けします。

世界遺産は氷山の一角！
多岐にわたるユネスコの活動領域

ユネスコの活動は世界遺産だけではありません。例えば、日本の学校教育すべての土台となっている「ESD」。これは日本が提唱しユネスコが世界へ広げたもので、国連は「SDGs 全 17 ゴール達成の鍵」と位置づけています。また、国境を越えて命を守る世界唯一の「津波警報システム」の運用や、急速な技術発展に伴う「AI 倫理」のルール作りなど、地球規模の課題に挑んでいます。以下に代表的な活動をリストアップしましたが、私たちの生活に活かされているユネスコの意外な一面に出会えるかもしれません。

教育	SDGs4(すべての人への教育)を主導	誰もが公平に質の高い教育を受けられるよう、各国の政策を支援。
	ESD(持続可能な開発のための教育)	気候変動や貧困など、現代社会のあらゆる課題を自分ごととして捉え、解決に向けて行動できる人材を育てる。
	紛争・災害時の教育支援	戦争や災害で学校に行けなくなった子ども達への教育支援。
	デジタル教育と AI 活用	教育現場での AI 活用や、デジタル格差を埋める指針作り。
科学	ユネスコ世界ジオパーク	地球の歴史を刻む地質遺産を保護し、教育や観光に活用することで地域振興を図る。
	ユネスコエコパーク(生物圏保存地域)	生態系を守りつつ経済活動を行うモデル地域の認定・管理。
	ユネスコ政府間国際水文学計画	世界的な水不足や水災害に対応する科学研究と国際協力。
	政府間海洋学委員会(IOC)	海洋観測を行う唯一の国連機関。津波警報システム運用、海洋プラスチック問題などの調査・研究。海洋科学の国際的な枠組み作り。
	科学技術の倫理(AI 倫理)	AI の差別や人権侵害を防ぐ世界共通ルール作り。
文化	世界遺産	顕著な普遍的価値を持つ建造物や自然(不動産)の保護・保全。
	無形文化遺産	和食や祭り、伝統芸能、社会慣習など、受け継がれてきた形のない「心」や「技」の継承。
	ユネスコ創造都市ネットワーク(UCCN)	創造性を活かした都市間の国際連携により、地域の発展を図り、持続可能な都市開発を行う。
	文化財の不正取引防止	戦争や盗難による文化財の違法な輸出入を防ぐ条約の推進。
情報・コミュニケーション	表現の自由とジャーナリストの安全	報道関係者への暴力や弾圧を防ぎ、独立メディアを支援。
	メディア情報リテラシー(MIL)	情報を正しく見極め、賢く活用する能力(リテラシー)の向上。
	世界の記憶(MoW)	歴史的文書やアンネの日記など重要な記録遺産の保存と公開。

皆さんはどのようなテーマに関心をお持ちでしょうか。
杉並ユネスコ協会では、私たちと一緒に活動してくれる方を募集しています。お気軽にお問い合わせください！
E-mail suginami@unesco.or.jp（西野）

書きそんじハガキ回収キャンペーン 世界各地の学校に通えない人々の教育支援
区役所などの区内公共施設に回収ボックスを設置中。ご協力をお願いします。

編集後記

ガザの停戦、国内初の女性総理誕生、困窮する子ども達の増加にクマ被害…。目まぐるしく飛び交うニュースに、私たちの関心は移ろいがちです。ふと思い出すのは 19 年前のこと。アル・ゴア氏は日本で「地球に残された猶予はあと 10 年」と訴えました。気候変動への報道が減ったからといって、危機が去ったわけではありません。ニュースの消費に終始することなく、足元のできることを一つひとつ大切にしていきたいですね。（副会長　西野裕代）

外国人への不安が広がっています。9 月には「JICA アフリカ・ホームタウン」構想の炎上騒動が起きました。原因は SNS での「移民促進」という誤情報の拡散です。真偽不明の情報をむやみに信じない、広めない。それによって善良な外国人まで傷つけることになります。100 年前に関東大震災で朝鮮人等が犠牲となった悲しい過去を、私たちは忘れてはなりません。（理事　岩野智）

杉並ユネスコ協会会報 156 号　2025 年 12 月 19 日発行
発行者　杉並ユネスコ協会 会長 佐藤直子
事務局　〒167-0031　東京都杉並区本天沼 2-32-10 朝倉方
TEL&FAX 03-3399-2383　E-mail suginami@unesco.or.jp
編　集　杉並ユネスコ協会広報担当
口　座　ゆうちょ銀行／記号 10040 番号 18974381（ゆうちょ銀行間での振込）
店名 〇〇八（ゼロゼロハチ）店番 008 番号 1897438（他行からの振込）
みずほ銀行／荻窪支店　普通口座　番号 4047995
ホームページ　http://suginami-unesco.org/

募 集

ユネスコ科学教室
「カメやカエルと友達になろう!!」
日本に住む爬虫両生類観察の手引き」

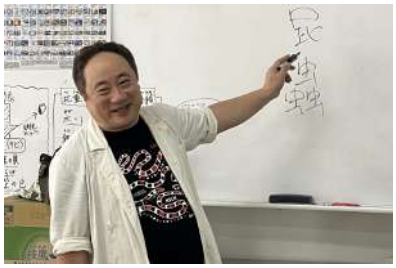
2026年３月８日（日）
「第11回すぎなみサイエンスフェスタ」に出展

日本は世界でも指折りの爬虫類・両生類の宝庫。人家の周りなど、私たちの身近な環境で「共生」しています。その意外な隣人たちの暮らしをのぞいてみよう。

●会場　IMAGINUS［イマジナス］
（杉並区高円寺北 2-14-13）

●講師　富田 京一 氏
（肉食爬虫類研究所代表）

※詳細は開催前に「すぎなみサイエンスフェスタ」ホームページ（https://sites.google.com/view/suginami-sciencefesta/Maine）等に掲載予定。



活動予定

12月 December
5 日（金）　理事会
10 日（水）　平和のためのポスターコンクール表彰式
20 日（土）　中学生クラブ（イヤーエンドパーティー）

2026年１月 January
9 日（金）　理事会
10 日（土）　中学生クラブ（英会話と国際理解）
31 日（土）　杉並ユネスコ協会新年会

2月 February
6 日（金）　理事会
14 日（土）　中学生クラブ（英会話と国際理解）
23 日（月･祝）　東京都ユネスコ連絡協議会研修会

3月 March
6 日（金）　理事会
8 日（日）　科学教室（カメやカエルと友達になろう!!）
14 日（土）　中学生クラブ（3 年生を送る会）
26 日（木）～ 29 日（日）　広島スタディツアー（青年部）

杉並ユネスコ合唱団練習　※は予定
12 月 11 日（木）　1 月 8 日（木）
1 月 22 日（木）　2 月 12 日（木）
2 月 26 日（木）　3 月 12 日（木）※
3 月 26 日（木）※